

メイン・ナーヴ

PART 3

片岡義男



カドカワ ノベルズ

昭和五十九年九月五月初版発行

著者 片岡義男 かたおか よしお

発行者 角川春樹

メイン・テーマ PART 3

印刷所 旭印刷株式会社

製本所 株式会社鈴木製本所

装丁者 岡村元夫

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二丁目三番 振替東京三十一九五〇八
二二三 電話 営業〇三三八八五三 編集〇三二三八八五二

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-04-774404-2 C0293

KADOKAWA NOVELS

メイン・テーマ
PART 3

片岡義男

本文イラスト／池田和弘

上空から見おろしたら、おそらく瓢箪ひょうたんのかたちをして
 いるだろう。大きくふくらんだ円に、それよりも小さく
 しかも偏平へんぺいな楕円だえんが、くっついていて、大きいほう
 が、水深は深い。縁ふちまでいっばいに満みちて
 いる湯の色と、平たい石を敷しきつめてつくった底の透す
 けぐあいによって、それはわかる。偏平なほうは、水深
 がはるかに浅い。満ちている湯の、水面のすぐ

下に底が見える。水深の深いほうにくらべると、底の
 つくり方がすこしだけちがっている。

瓢箪の外周は、サイズのほぼそろった大きな石で
 つくってある。丸みのある石をいくつもつらねたり
 かさねあわせたりして、外周がかたちづくってある。
 湯の満ちている内部は、やはり浴槽よくそうと呼ばばいいの
 だろうか。この旅館りやくかんの敷地しきち内にある、露天風呂ろてんぶろの浴
 槽だ。

瓢箪の下部、大きく丸くふくらんだほうの浴槽は、
 直径が三〇メートルはある。中央に、石のかさなり
 あった山がつくってある。瓢箪の上部、小さくて偏
 平になっているほうは、三分の一ほどの広さだ。き
 れいに澄すんだ湯がどちらにも満ちている。小さいほ
 うの湯面は静かにまっ平らだ。大きいほうでは、片
 隅すみから小波さざなみがはじまり、ぜんたいに広がっている。

小波のはじまるところに、熱い湯の注入口があるのだ。

瓢箪のかたちをしたこのかなり大きな浴槽の縁は、コンクリートでかためてあり、ぐるっとひとまわり歩くことができる。偏平な、小さいほうの浴槽の上部、瓢箪なら蒂へたのつくあたりに、東屋あずまやが一軒、建っている。

屋根を四方にふきおろしたその東屋は、正方形だ。白木しろきの丸く太い柱が四隅に立ち、階段のつけてある一辺をのぞいて他の三辺は、フロアから腰こしのかくれる高さまで、腰板で囲ってある。壁はない。

その東屋を中心にして、背後の両側は、スロープとなった林だ。このスロープの上に、旅館の建物がある。背後および両側を濃い緑の林でかこまれている露天風呂は、大きいほうの浴槽の下部へまわって

その縁に立つと、露天風呂の背後にあるのとおなじような林のスロープを見おろすことができる。スロープは、長くつづいている。そして、そのスロープのさらに前方になにがあるのかは、雨に煙って今日は見えない。

露天風呂の浴槽に満ちている湯は、林の色をうつしてほんのりとグリーンだ。あと数日で五月が終る日の午後四時すぎ、気温は二四・八度。温泉には誰も人が入っていず、こまかな雨が音もなく湯の上に降っている。

旅館からこの露天風呂へおりてくるための階段が、林のスロープのなかにつくつてある。横幅が一メートル足らずのコンクリートの階段の両わきは、石をかさねあわせてかためてある。その外は、丈たけは低いけれども濃く茂しげった木々の深みだ。階段は、林のス

ロープをおだやかに蛇行^{だこう}している。

その階段を、伊東亜里沙^{いとうありさ}が、ひとりで降りて来た。スカートに半袖^{はんそで}のシャツを着て、素足^{すあし}だった。開けないままの番傘^{ばんがさ}を一本、彼女は持っていた。

階段を降りきった彼女は、深いほうの浴槽の縁に向かつて歩いた。縁の石の上に立ち、直径三〇メートルの浴槽を見渡した。

こまかい雨を肩に受けながら、彼女は東屋へ歩いた。木でつくつてある三段だけの階段をあがり、シャツの胸ポケットからバンダナをひっぱり出した。

番傘を隅に立てかけ、バンダナをテーブルに置いた。

スカート、そしてシャツを、彼女は脱いだ。ショ

ーツをはぎとるように脱ぐと、リサは裸^{はだか}になった。

足もとのかごのなかに、おおざっぱにたたんだ服を入れた。

バンダナを持ち、リサはそれを広げた。淡いグリーン^{あふ}のバンダナだった。視覚的に軽快な爽^{さわ}かさをともなう、きれいな発色の、淡いグリーンだ。一辺が五四センチの正方形であり、素朴^{そぼく}で単純だがよく出来ていて見飽^みきることはない花模様が、数センチの幅でボーダーになっている。そのボーダーの内側には、単純化してデザインした小さな花が、規則的なパターンで散らしてあった。花模様はその大部分が淡いグリーン^{あふ}の地に白で抜いてあり、アクセントとして効果的に黒がその白い模様にとつてのシャドーのようにプリントしてあった。

広げたバンダナを持ち、リサは東屋の階段を降りた。浅いほうの浴槽に入った。湯は、彼女の美しい太腿^{ふともも}のなかばあたりまで来た。深いほうの浴槽との仕切りに向かつて、裸のリサは湯のなかを歩いた。





パンダナを口にくわえ、歩きながら両手で髪をうしろにまとめた。そして、パンダナでその髪をしばった。髪をうしろにひきつめてパンダナでたばねたヘア・スタイルが、すぐに出来あがった。

淡いグリーンや白く抜いた花模様が、美貌の彼女によく似合った。彼女の全身の肌は、本来は白いにちがいない。しかし、いまは、ごく淡く、陽焼けしていた。ひきしまった量感のある体に、ワンピースの水着の陽焼けあとが、かすかに見えた。細い肩ひものあとが、広さと厚みのあるしっかりとした肩から、胸のふくらみが乗っているスロープにかけて、うっすらと残っていた。

浴槽の仕切りの石を、彼女はまたいだ。深いほうに入り、中央にある岩の島へ向かって、リサは歩いた。

一歩ごとに、浴槽は深くなった。岩の前まで来て、彼女の胸のふくらみが、ちょうど湯の下にかくれた。岩を背にしてリサは東屋のほうに向きなあった。

そして、空をあおいだ。

梅雨前線が、すこしずつ、北上して来ている。その影響下で降っている雨だ。雨滴を、彼女は顔に受けた。あと数日で五月は終り、六月となる。沖縄はすでに梅雨であり、九州南部の梅雨入り宣言が出たばかりだ。

湯のなかに立っているリサは、雨と湯の香りに加えて、林の樹々の香りも、全身で感じとり、楽しんでた。

しばらくして、西田章彦と清水光治のふたりが、スロープのなかの階段を降りて来た。ふたりとも色あせたスイミング・トランクスをはき、濃く陽焼け

した上半身は裸だ。ふたりとも、素足だった。

西田はアップル・サイダーの小瓶をひとつ片手に持ち、清水は白い大きなバス・タオル四枚と浴衣を一着、腕にかかえていた。

リサが、ふたりに湯の中から手を振った。

「湯は、熱いですか」

階段の下に立ちどまって、清水がきいた。

リサは、首を左右に振った。

「ちようどいいわ。そんなに熱くはないし、ぬるすぎもしないの」

清水は、リサの言葉に、うなずいた。そして、西田のあとについて、東屋へ歩いた。

東屋の階段をあがり、ふたりは板張りのフロアに立った。かかえていたバス・タオルや浴衣を、清水はかたわらの椅子の上に置いた。

「ほんとに、熱くないのかな」

浴槽のほうを見て、清水が言った。

「熱い風呂は、苦手だ」

「熱くないって、リサさんは言ってたじゃないか」

「うむ」

「手前の小さいほうに入れば、ぬるいんだ」

偏平で小さいほうの浴槽を片手で示し、西田が言った。

「浅いから、したがって、ぬるいはずだ」

「したがって」

「そうだよ」

「信じよう」

西田はアップル・サイダーの瓶を唇へ持っていき、アップル・サイダーを飲んだ。

自分と交代して清水が部屋でリサとふたりで過ご

しているあいだ、西田は、ステーション・ワゴンの助手席で待っていた北原仁美きたはらひとみといっしょに、昼食を食べた。コーヒーを飲み、雨の中をあちこち走り、午後四時すぎに仁美をつれて旅館へ帰って来た。清水とリサは、旅館のロビーのような部屋でソファにすわり、ところ天を食べていた。

四人でいっしょに露天風呂に入ろうとリサが言い、いまこうしてリサと西田、それに清水の三人がここにいる。まもなく、仁美が降りて来るはずだ。

自分が飲んでいるアップル・サイダーの瓶を、西田は見た。淡いグリーンのがラスを使った平凡だが洒落しやれたかたちの瓶に、美しくリンゴを描いたレイベルが貼はつてある。このアップル・サイダーは南アメリカ産だ、とそのレイベルには印刷してあった。

「おい」

と、西田が言った。

「なんだ」

「このアップル・サイダー」

「どうした」

「ひと瓶につき、リンゴが五個分だってよ」

「へえ」

「五個だぜ」

「うん」

フランス語レイベルのわきに、日本語で印刷して貼つてある小さなステッカーの、こまかな文字を西田は読んだ。

「合成保存料とか砂糖とかが入ってなくて、健康的なのだって」

「なるほど」

西田は、アップル・サイダーの小瓶をかかげてみ

せた。

「ほら、見てみる」

西田が言った。

「どうした」

「瓶に目盛りがついてる」

「そうか」

「目盛りは五つある」

「うん」

「この小さな瓶の総容量が、五等分に目盛ってある」

不思議なものでも見る口調で、西田が言った。彼の口調に、清水は、アップル・サイダーの瓶をのぞきこんだ。

「ほら。五等分だ」

「なるほど」

「ということは、ひと瓶でリンゴが五個分だから、ひと目盛りだと、リンゴ一個なんだ」

「そのために目盛りがしてあるのか」

「そうだろう。だって、わざわざ五等分なもの」

「リンゴ一個分ずつ飲んだりする人のために」

「きつとな」

西田は、アップル・サイダーを清水にさし出した。

「俺は、ちょうど二個分、飲んだ。おまえも飲め」

清水は、瓶を受けとった。

「二個分、飲むのか」

「そう」

「一個分、あまるよ」

「リサさんに飲んでもらえ」

うなずいた清水は、瓶の口を唇につけた。アップル・サイダーを口のなかに流しこんだ。何度か瓶を